24th 新響

新交響楽団

第24回定期演奏会

THE NEW SYMPHONY ORCHESTRA
24th Subscription Concert

新交響楽団第24回定期演奏会

指揮 Conductor　芥川也寸志 YASUSHI AKUTAGAWA

ピアノ独奏 Piano Solo　池場文美・中井正子 AYAMI IKEBA MASAKO NAKAI

I　劇的物語「ファウストの却罰」Op.24より ……エクトル・ベルリオーズ
MUSIC FROM "LA DAMNATION DE FAUST" ……Hector Berlioz

No. 18　鬼火のメヌエット
No. 18　Menuet des follets
No. 12a　妖精の踊り
No. 12a　Ballet des Sylphes
No. 3b　ハンガリー行進曲
No. 3b　Marche hongroise

II　2台のピアノための協奏曲 変ホ長調 K.V.365 ……ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト
CONCERTO FOR 2 Pianos E♭ major K.V.365 ……Wolfgang Amadeus Mozart

第1楽章　アレグロ
1st Mov.　Allegro
第2楽章　アンダンテ
2nd Mov.　Andante
第3楽章　ロンド　アレグロ
3rd Mov.　Rondo Allegro

III　交響曲第7番　イ長調　作品92……ルードヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン
SYMPHONY No.7 in Amajor Op.92 ……Ludwig van Beethoven

第1楽章　ポコ・ソステヌート――ヴィヴァーチェ
1st Mov.　Poco Sostenuto――Vivace
第2楽章　アレグレット
2nd Mov.　Allegretto
第3楽章　プレスト
3rd Mov.　Presto
第4楽章　アレグロ・コン・ブリオ
4th Mov.　Allegro con Brio

1972年1月12日(日)午後6時半
東京文化会館大ホール

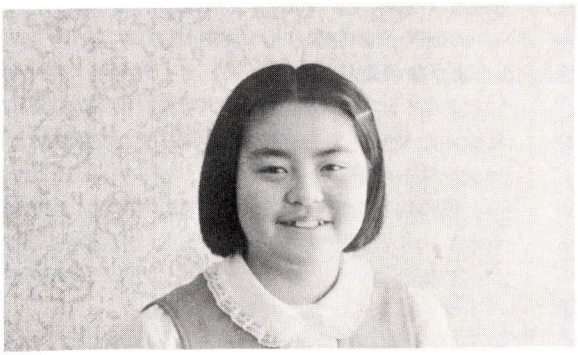
——音楽監督・常任指揮者——

芥川也寸志

Yasushi Akutagawa



1956年、新響発足以来の常任指揮者。
1971年からは音楽監督を兼ねる。
作曲、テレビ、ラジオ等での活躍は紹介するまでもないが、今年は新響内部で一つの改革を断行した。
それは新響が単なる音楽好きの集りであるだけに終らない演奏団体としての体制を整えること。さらに多数の音楽を愛する方々の支持のもとにオーケストラ活動を行う。このために、このプログラムの後の方で紹介する維持会員制度を提唱し実行に移した。これらの成果は遠からず演奏上に現れるであろう。



——ピアノ独奏——

池場　文美

Ayami Ikeba

6才の頃から桐朋学園音楽教室幼稚科に入室。
杉谷昭子、権藤譲子を経て、12才の頃から、井口秋子に師事、現在に至る。
趣味は読書。バレーボールを好むがつき指をしてからは自分でやめたという。何事も自分で進んでする積極的な性格。
逗子に住み、家庭は1人娘。葉山中学校2年。



中井　正子

Masako Nakai

3才の頃から、桐朋学園音楽教室により、高柳秋子、富本陶、を経て、12才の頃から、井口秋子に師事、現在に至る。
趣味は、習字、絵画、能の観賞と他の芸術にも強い関心を示す他、水泳もするという活発なお嬢さん。ご家庭は池場さんと同じ1人娘。住いは、世田谷区三軒茶屋で、学芸大学付属世田谷中学校2年生。

推薦のことば　池場さん、中井さん共に音楽性に恵まれた子供達です。3年程私の教室でピアノの勉強をしていますが、子供なりに私の言う事を吸収して1人でやってゆけるようになりました。
この度は子供達にはなかなか機会の恵まれないオーケストラとの演奏ができます事になり本当に嬉しく思います。楽しい演奏会になりますよう心から願って居ります。
———井口　秋子

曲目解説

劇的物語〈ファウストのごう罰〉作品24　ベルリオーズ

劇的物語＜ファウストのごう罰＞はベルリオーズの最大傑作の一つである。彼はパリ音楽院時代にゲーテの＜ファウスト＞を読んで大感激し、本を肌身はなさず持ち歩き、食事のときも、町を歩くときも、劇場の中でも愛措した。そして1828年にまず＜トゥーレの王のバラード＞を書き、翌年＜ファウストの八つの場面＞を書いて自費出版した。ベルリンの批評家マルクスはこの楽譜を読んでおどろき，ベルリオーズをはげます手紙を送ったが、作曲者自身はでき栄えが不満で、一度売出したスコアをでき得る限り取り戻して焼いてしまった。こうした経過をたどった後、ついに1845年、オーストリアとハンガリア地方を旅行している最中に、ベルリオーズの胸は再び＜ファウスト＞を作曲したい情熱にかりたてられたのである。

この旅行の少し前、彼はベートーヴェンの銅像の除幕式に招待されて大作曲家の名作に接し、新たな創作欲に燃えていたのだが、演奏旅行中は＜ファウスト＞のテキストを持ち歩き、鉄道の中でも、船の中でも、駅馬車の中でも創作の筆をすすめた。このようにして完成した作品は、独唱、合唱、管弦楽を有する全四部からなる大作で、劇的物語と名づけられた。すなわち演奏会形式の歌劇と同じ形である。しかし全曲からの抜粋で行なわれた1846年の初演は失敗に終わり、ベルリオーズは莫大な借金を背負いこんでしまった。この曲の真価が認められるには、作曲者の死後８年を経た1877年、パリ・コンセール・コロンヌの演奏会における全曲初演をまたなければならないのである。

19世紀、ロマン主義はなやかなりし時代の若者にとって、ゲーテはシェークスピアやバイロンなどと共に感動の源泉であった。特にベルリオーズのような多感な芸術家においておやである。＜ファウスト＞の中にはベルリオーズのすべてがあり、＜ファウストのごう罰＞に、それらは最も多様な表現をもって、音楽としての生命力を興えられたのであった。なお、この作品は歌劇の形で上演されることもある。1893年、モンテカルロで行なわれたものがその先鞭となったわけだが、ベルリオーズ自身はこれをあくまでカンタータとして書き、歌劇にするには大改造が必要であるむねを強調している。尤も、彼自身、この大改造に一時熱中したことは事実のようだが、実現には至らなかった。＜ファウストの劫罰＞の中で、＜よう精の踊り＞＜鬼火のメヌエット＞＜ハンガリー行進曲＞の三つは演奏会用管弦楽曲として、しばしば独立して演奏されている。

a. 鬼火のメヌエット

第３部、マルガレーテの部屋で、＜トゥーレ王の物語＞を歌った彼女は眠りにさそわれる。メフィストは呪をかけてから鬼火の精を呼び出すと、奇怪な精たちが現われて、眠っているマルガレーテの廻りを踊りはねる。第２部の＜よう精の踊り＞に相対する音楽で、軽快なリズムと美しい旋律によった魅力的な曲。幼想の中に、時にクレッシェンドが無気味な効果をあげるのだ。

b. よう精の踊り

第２部、エルベ河畔の花咲く野原で、若く美しい青年となったファウストが眠っていると、悪魔メフィストがファウストの夢をいっそう美しくするためによう精を呼び、彼の廻りを舞わせる。この夢の中でファウストはマルガレーテの幻を見るのである。ソフトな香りとデリカシーの極をつくしたワルツが、そよ風のように歌われ、ハープが夢見るような伴奏をあたえる。

c. ハンガリー行進曲

ベルリオーズは＜ファウストのごう罰＞を作曲中、ハンガリーのペストにおいて、古い国民歌＜ラコッツィ行進曲＞を聞いていて感激し、どうしても新作の中にとり入れたくなり、これを管弦楽化すると共に、原作にはないハンガリーの場面まで作ってしまった。これは18世紀、

……解放的な楽しさのあったこの野外コンサートに対して、大デモンストレーション的爽快さで暑さを吹き飛ばしてくれたのが、**東京交響楽団・新交響楽団**合同サマー・コンサートであった（８月23日・東京文化会館）。　新響というオーケストラは、アマチュアではあるが一応フル編成である。　それが同じくフル編成の東響と一緒に一つのステージに乗ったのである。見ているだけで壮観であった。ステージ右にはコントラバスが14本……まさに〝林立〟している。そしてティンパニーが２人の奏者で叩くから計４対。他の楽器も、それぞれ通常の２倍の人数がいて計 200人近い巨大なオーケストラなのだ。そして、出てくる音も、強烈そのもの、まさしく音の大デモンストレーションであった。曲目も、ルソルグスキーの《はげ山の一夜》、チャイコフスキーの《スラブ行進曲》、ムソルグスキーの《展覧会の絵》とデモ効果の大きい曲が選ばれ、聴き手は、壮大な音の渦にまき込まれていった。　なお指揮は２曲までが小林研一郎、３曲目のチャイコフスキーのピアノ協奏曲第１番（これは東響のみが出演しピアノは小林仁であった）と《展覧会の絵》が秋山和慶であったが、２人とも大変な力演で、演奏そのものも充実していた。ただ、小林仁のピアノは、ややオーケストラとしっくりいかなかった点が惜しまれた。
（長谷川武久＝音楽の友12月号）

ハンガリー独立革命の青年指揮者ラコッツィ公の宮廷楽師ミハエル・バルナの作曲によるもので、そのために＜ラコッツィ行進曲＞とも言われる。
＜ファウストの劫罰＞第1部は、ハンガリーの平原、老博士ファウストが一人いるところへ遠くから軍隊ラッパが聞こえ、＜ハンガリー行進曲＞の音楽につれて出征する軍隊が行進してくる。ベルリオーズはこの曲の初演のさい、あの壮大なクレッシェンドのところで思わず身ぶるいし、頭髪を振り立てて指揮をしたということだが、まことに情熱家ベルリオーズを彷彿させる逸話であり、また曲である。　（宇野　功芳）

2台のピアノのための協奏曲　変ホ長調　KV365
モーツァルト

大作曲家の作品の中にはシューベルトの総ての交響曲のように、全く演奏される当てもなく作曲された曲もありますが、モーツァルトの協奏曲の場合には、演奏者や演奏される場所等の具体的なイメージをもって作られたのが普通です。この曲はモーツァルト自身と姉のナンネルが独奏部を受け持つことを頭において書かれたもので二人は共に当時ヨーロッパで第一級のピアニストでしたから、独奏部には思うままのパッセージを用いることが出来たでしょう。モーツァルトにとってどの様な楽器の組合せの曲でも、各楽器の機能を最大限に発揮し、独奏者の腕前に丁度良く合った難かしさの曲を、息もつかせぬ速さで書きあげてしまうことは得意中の得意の仕事でした。

モーツァルトのこうした才能は、むしろ彼の晩年の交響曲の様な真に深遠な作品を書きあげることを、かえって妨げたかもしれませんが、これは一つには彼の本質的な性格に依ったものであり、又、この様な作風の中から高い芸術性を生み出したことこそモーツァルトの真価なのかもしれません。

モーツァルトはこの作品の他に変ホ長調の2台のピアノための協奏曲をもう一曲書いており、この2曲とも非常にモーツァルト自身の気に入っていたと言われます。バッハやブラームスの様な作曲家なら2台のピアノにより独奏部の〝声部〟を増やせることを重要視したかもしれませんが、モーツァルトはこの曲で2台の独奏ピアノを交互に競わせることに重きを置いているのが特徴的です。全曲はオペラの重唱の様に二つの独奏部の〝対話〟によって構成されており、ソロの掛け合いや絡み合いの面白さはウィットに富むモーツァルトならではのものでその楽しさはレコードよりも生の演奏で一層よく味わえるでしょう。しかし、この曲はただ〝楽しい曲〟に終っている訳ではなく、処々にピアノ用法や和声に対する斬新な感覚がきらめいており、傑作といわれる彼自身のハ短調の協奏曲やベートーヴェンのピアノ協奏曲へも相当な影響を与えているでしょう。

モーツァルトの時代には室内楽に限らず協奏曲の場合でも、演奏会場だけでなく宮廷や邸宅の中で演奏された事が多く伴奏のオーケストラもかなり小編成であったわけですが、これは当時のピアノの性能と関係した事でしょう。ピアノは200年も形は変っていない弦楽器と異って絶えず改良が加えられてきており、音色は次第に張りとつやを増し音量は次第に豊かになりつつあります。モーツァルトが生存中使用していたピアノは現在まで保存されているものもあり、このピアノでモーツァルトの曲の演奏録音がとられたことがありますが、これを聴くと当時のピアノの音色は、現在のピアノとチェンバロの音を足して2で割ったような感じと思っていいようです。

おそらく、こうした当時の楽器との音色の相違から、例えばバッハのピアノ（クラヴィア）協奏曲などでは今日の演奏では独奏と伴奏の音がどうもしっくり行かない感がありますが、モーツァルトの協奏曲の場合、彼の〝珠をころがす〟ようなピアニズムが今日のピアノによる演

“オーケストラの名曲800選”をお頒けします――レコード、総譜の収集に、鑑賞の手引に！

古今のオーケストラ曲（管弦楽、弦楽合奏、管楽合奏、管弦楽伴奏付独奏曲）3000曲の中から、
①オーケストラのレパートリーとしてしばしば演奏される曲
②あまり演奏はされないが、レコード、放送等でとりあげる優れた曲
を約800曲選び、その中で更に有名と思われる400曲に○印をつけて、作曲者別、時代順に配し、演奏時間を付しました。ご希望の方は下記へ実費同封の上、お早めに申込み下さい。

「オーケストラの名曲800選（生年順作曲者別）」
（付）合唱の名曲50選　　B5版タイプ印刷12頁組　**頒布価　140円（20円切手可）**
〒160 新宿区須賀町14 大湊ビル 新交響楽団宛　（「名曲800選申込み」と付記）

曲目解説

奏とも良く合うことは、我々にとって非常な幸運であると思われます。

第一楽章 アレグロ　第二楽章 アンダンテ　第三楽章 ロンド アレグロ　（菱沼　佳史）

交響曲第７番　イ長調　作品92　　ベートーヴェン

ベートーヴェンの第７交響曲の初演は1813年12月8日、ウィーン大学の講堂で、戦傷兵慈善演奏会においてである。この日のプログラムには、ベートーヴェンの《ウェリントンの勝利》(一般に《戦争交響曲》というほうが通りがよい）もあわせて上演された。この曲はメトロノームの発明者メルツェルが発明した自動トランペット吹奏機などがつかわれていることが評判になって大好評を博し、４日後の12月12日にも再演されたくらいであるが、第７交響曲もまた聴衆に多大の感銘を与え、第２楽章などはそっくりアンコールでくりかえし演奏されたほどであった。この曲は1814年２月27日、11月29日、12月２日と再演が相ついだ。ベートーヴェンの９曲の交響曲のなかで、初演のときからひろく愛好されたのが第７交響曲であった。

第７交響曲の草稿には1812年５月13日という日付がはいっているのでこの日に完成したとする説が一般に容認されているが、ベートーヴェン伝の著者セイヤーは1812年春に書きはじめたという説を出しており、ベートーヴェンの12年５月８日の手紙には新しい交響曲の構成が進進んでいます”とあり、７月19日付の手紙では“新しい交響曲がほとんどできました”といっているのはこの曲を指すものだとしている見解もあるが、いずれにせよ、1811～２年に完成したことはたしかであり、慈善演奏会に先立って1913年４月20日にはルドルフ大公邸で非公開の演奏が行われているから、公開初演のかなりまえに完成したことは間違いない。

ベートーヴェンの年譜を見ると、ウィーン時代の中期1800年頃からの10数年が、彼の創作力のもっとも充実した時代に当っている。つまり彼の30歳から40歳代の半ばまでにあたる。交響曲だけを見ても、1800年に第１が完成初演され、1804年に第３（英雄）、1808年に第５（運命）と第６（田園）、そして1813年に第７、14年に第８が発表されている。第３の前後には《クロイツェル・ソナタ》や《熱情》などの中期のピアノ曲の重要作品、第5・6の前後にはヴァイオリン協奏曲、《皇帝》イ長調のチェロ・ソナタが、第７の前後には《大公》トリオ、第８などがならんでいる。そして、それぞれの時期において、交響曲が彼の新たな創作力をもっとも高度に具現したものとなっていることは改めて言うまでもあるまい。43歳のベートーヴェンはすでにウィーンでもっともたかい声価をかちえていた作曲家であった。初演当時のウィーンの《綜合音楽時報》の批評においても、“ベートーヴェンのあらゆる交響曲のうちでも、最も旋律の豊かさと快さをもった、理解しやすい作品である”といい、その後楽譜を出版（1816年）のときも、“この交響曲はベートーヴェンははかり知れぬ才能の新たな証明をなすものだ”と評している。

ベートーヴェンの第７については多くのひとが多くのことをいっているがなかでもワーグナーが“舞踊の聖化”といった名言はあまりにも有名である。ワーグナーのその言葉は彼が1849年９月に書いた《将来の芸術作品》というエッセイに見られたものである。そのなかで、ワーグナーはベートーヴェンの第7についてこういっている。

“この交響曲は舞踊そのものの聖化である。それはもっともたかいかたちをとった舞踊であり、理想的に鋳出された音によって肉体的な一体化が気高く達成されたものである。メロディーとハーモニーは、リズムの強靱な骨骼としっかりとむすびつけられ生きた人間のように形成される。それは、巨大な四肢の敏捷な動きを見せたり、やわらかくしなやかさとなったりしてわれわれの眼前に

新　響　第 25 回 定 期 演 奏 会

日　時　1973年３月24日（土）　午後７時
会　場　東京文化会館大ホール
曲　目　＜チャイコフスキーの夕べ＞
　　イタリア綺想曲
　　ヴァイオリン協奏曲
　　交響曲第６番「悲愴」

指　揮　芥川也寸志
独　奏　未　定
演　奏　新交響楽団

展開する。あるときは優しく、また大胆に、まじめに、気まぐれに、思いいれもあったり、憂鬱げな様相を見せ、この死ることを知らぬ音はひたすら前進し、ついに、最後の歓喜の狂乱のうちに、勝利の口ずけと抱擁のうちにおわる。"また、ベルリオーズも第7交響曲を素晴らしい作品と讃えたが、とくに緩徐楽章を"まさに近代音楽の奇蹟"といって歎息した。

第1楽章　ポコ・ソステヌート――ヴィヴァーチェ

ベートーヴェンの交響曲で序奏部をもっている作品は第1・2・4とこの第7番の4曲あるが、第7のそれは62小節におよぶ長大なもので、ゆったりとおちついた運びのなかに主部1の緊迫感が準備される。序奏部の2つの動機はオーボエに現われ、展開されるが、この序奏部の終結部にヴィヴァーチェ主部の核心をなすリズミック・パターンが用意される。主部のヴィヴァーチェはフルートによる第1主題が中心となっている。6/8拍子のリズムは第1・第4拍に附点をもった躍動感をもったもので、全楽章はほとんどこのリズミック・パターンをもって貫かれ、昂揚される。"ひとつのリズム形式を執拗にくりかえしてこれほど成功した例はない"とベルリオーズはいっている。

第2楽章　アレグレット

イ短調、2/4拍子で書かれたこの楽章はベートーヴェンの交響曲のなかでもいちばん愛されている。(初演のときにこの楽章だけがそっくりアンコールされたことは、まえに書いたとおりであり、こんな例はほかにない。)

木管の2小節の和音のあと、低弦(ヴィオラ、チェロ、コントラバス)が、神秘的で憂愁感をこめた主題をゆったりと歌いはじめる。主題はヴァイオリンがうけとりヴィオラとチェロが美しい対旋律をつけ、このふたつの主題を中心にした変奏が行われる。

中間部は明るいイ長調に転じて、クラリネットとファゴットが牧歌的な旋律をうたいあげる。ここでも低弦が主部のリズミック・パターンで曲の進行を支えており、第1楽章と同様に基本リズムは終止くずされることがない。再びイ短調の主部にもどるが、まえに低弦に現われた対旋律が木管に、主旋律が低弦に現われ、このふたつの主題による二重フーガとなってクライマックスをもりあげ、コーダでは中間主題が回想され、主要主題の断片化のふかい余韻のうちにおわる。

第3楽章　プレスト

ヘ長調、3/4拍子のスケルツォ楽章である。いきなり最強音で叩きつけるような豪放なスケルツォ主題が、ここでも強烈なリズムの足どりのなかにくりかえされる。トリオはテンポはぐっとおとされ(アッサイ・メノ・プレスト　ニ長調)でホルンの持続音からクラリネットとファゴットがのどかな単純な楽型の主題を出し、ヴァイオリンが高いイ音を保持してスケルツォ主部の荒々しさにたいするコントラストをもった色調を添える。この楽章はスケルツォ――トリオ――スケルツォ――トリオと2度くりかえされたあと、最後のスケルツォのあとでもう一度トリオにはいってその執拗さにびっくりさせられるとたんに、みじかいコーダであっという間に終ってしまう。

第4楽章　アレグロ・コン・ブリオ

ワーグナーのいう"舞踏の聖化"はこの楽章で完全に達成される。イ長調、2/4拍子。主要リズムの断片が念を押すようにちらっと現われる。全休止ではっと息をのんだとたん嵐のような主題が勢力的に走りはじめる。シンコペートされたリズムのアクセントがその効果を一層強烈なものとしている。第2主題は弱奏でヴァイオリンから導き出されるが、これもシンコペーション・リズムが基調となったものである。そのあと、展開部(第1主題を中心にめまぐるしい転調をしてゆく)、再現部(第1、第2主題の順で原調にもどる)とつづくが、主題の熱狂性はさらに灼熱化されて、舞踊の聖化が達成されるのである。

(岡　俊雄)

新響・団員募集中!!　――団員募集要領が変わりました――

入団希望者に対しては原則として、月の最終日曜日の午後、オーディションを行い、新響のレベル、パート人員の必要度、本人の環境、入団意志などを考慮して決定します。
オーディションでは、課題曲(下記)、自由曲、初見のアンサンブル曲を演奏していただきます。

《課題曲》

Vn	モーツァルト	協奏曲第5第1楽章
Vla	エックレス	ソナタ第2楽章
Vc	ヴィヴァルディ	ソナタ第5第2楽章
Cb	カプッツイ	協奏曲　第1楽章
Fl	モーツァルト	協奏曲ニ長第1楽章
Ob	ヘンデル	ソナタ第1第1楽章
Cl	ウェーバー	小協奏曲　第1楽章
Fg	モーツァルト	協奏曲　第1楽章
Hr	モーツァルト	協奏曲第3第2楽章
Tp	ハイドン	協奏曲　第1楽章
Tb	R.コルサコフ	協奏曲第1, 2楽章
Tub	ワーグナー	マイスタージンガー

(楽譜のない方はコピーをお貸します)

《オーディション日程》
11月26日(日)　午後1時
1月28日(日)　午後1時
2月25日(日)　午後1時

《問合せ先》
① 団員をご存知の方は団員を通して。
② それ以外の方は人事担当の橋谷幸男まで。
自宅332-4075, 会社563-4451内283 (キグナス石油燃料油課)

《申込先・オーディション場所》
〒160 新宿区須賀町14大湊ビル　**新交響楽団** TEL 357－5255
国電信濃町と地下鉄四谷三丁目の丁度中間、どちらからも徒歩5分、2つ目の信号、八百屋裏、CPA学院のビル4F

新響維持会員制度について！

日本フィルハーモニー交響楽団が日本フィル(組合側)、新日フィル（非組合側）の２団体に分裂してしまったことは音楽を愛する者にとって最近の最も悲しむべきできごとにちがいありません。

プロ野球ではパリーグの東映と西鉄がやはりスポンサーを探して大ゆれにゆれています。　音楽とスポーツと分野は異りますが、これは音楽界、プロスポーツ界の大きな問題を共に含んでいます。

すなわち、一人の理解者の絶大な負担によってしか存続し得ないという従来の運営形態がそれです。オーケストラ界では、これを補うために、法人の賛助会員を募集しているところもあります。

しかし、オーケストラ、プロ野球など多数の聴衆、観衆を相手とするものは、逆にその聴衆がいて始めて成立するものであることを考えれば、これからの運営形態としては大勢の支持者の少しずつの賛助によって維持されることが理想と考えられるわけです。

幸い、わが新響はアマチュアであり、出演奏者は報酬を必要としませんから経費も比較的安上りで済みます。団を維持をするために何万人もの支持者を必要とはしませんからわりと理想に近い形でこの考え方を実行に移す事ができるわけです。

今回実施に踏み切った維持会員制度は、ご支持頂く方々からの打算的な考えでは、あまり得になることはないと敢えて申しあげますが、自分のささやかな支持の気持によって新響というアマチュアのオーケストラが、溌剌とした演奏活動を続けられているという精神的な暖かさをもってその対価と考えて頂ける方々に訴えるものです。

新響維持会員制度のあらまし

団員を通じて、又は事務局へ直接、年額１口(1200円)以上をご入金頂く。

⇨

領収書及びきれいな維持会員証を折り返しお渡しします。

⇨

- 今後１年間、ご案内をさしあげる演奏会（ほぼ２回）に自由に入場できます。
- ご来場の方にプログラム贈呈
- 定期演奏会プログラムにご芳名掲載。
- 他の新響演奏会も優先割引。

（申込・送金方法）　維持会員申込と付記の上、下記迄。

◇郵便振替　東京 177,071　新交響楽団

◇現金書留　〒160 新宿区須賀町14　大湊ビル　新交響楽団宛　（銀行振込はご容赦ください）

新響・登録会員募集中

登録会員は維持会員よりも拘束がゆるやかな会員制度です。　いってみればよい演奏会があれば聞くという受動的会員が登録会員。積極的に立派な演奏をするよう支持して頂くのが維持会員です。

□ 新響の演奏会の御案内を毎回お送りします。

□ 入場券は一割引させて頂きます。

□ 連絡ハガキを提示して頂けばプログラムは無料でさしあげます。

申込みは、〒160 新宿区須賀町14大湊ビル　新交響楽団宛　ハガキにて　郵便番号、住所、氏名（フリガナ）、生年月日、ご職業、もしありましたらご所属の音楽団体、楽器をやられる方は楽器名を付記してください。

新響・“鯨”第九特別演奏会

日　時	12月17日(日)午後６時半、19日(火)　午後７時
会　場	日比谷公会堂
曲　目	トッカータとフーガ　ニ短調……バッハ＝ストコフスキー 交響曲第９番　ニ短調　Op.125「合唱付」……L. V. ベートーヴェン
演　奏	指揮：芥川也寸志　　管弦楽：新交響楽団　　合唱：合唱団“鯨”、星薬科大学合唱団 独唱：常森寿子(Sop)　志村年子(Alt)　金谷良三(Ten)　原田茂生(Bar)
入場料	S：700円　　A：500円　　B：300円（全指定席）　▷都内プレイガイドにて前売中



新交響楽団

新交響楽団、新響は名前こそN響の前身と同じですが純然たるアマチュアのオーケストラで、名簿に見るように、サラリーマン、学生、主婦など、音楽を職業としない120名の団員から構成されています。

週1回土曜日、東京文化会館地下のリサーサル室での練習を基礎として、月々 400円の団費と、演奏会の収入による独立採算で運営されています。

昭和31年創立以来の常任指揮者芥川也寸志氏の献身的指導によって、現在日本で望み得る最高レベルのアマチュアオーケストラとされており、42年秋の訪ソ旅行、44年秋の沖縄九州旅行という華やかな活動がある反面、週1回2時間半の練習、実質的には何の拘束もない任意団体であるという絶対的な制約をうけているため、累積赤字をかかえて常に解散の危機に瀕しているといっても過言ではないでしょう。

新響を存続させるものは、一緒にアンサンブルを創るという一点にしかありません。2～3回の練習で演奏会をもつというプロのオーケストラにはできないような、すみずみまで奏きこんだ演奏をモットーとし、毎週の練習自体をも一つの目的とする緊張と充実が団員の共通の目標となっています。

新響のもう一つの目的は、オーケストラを団員の自己満足としてでなく、できるだけ沢山の人に聴いてもらいたいという演奏団体としての活動です。昨年から新たに若手指揮者のホープ小林研一郎氏を指揮者として正式にお迎えし、芥川先生とタクトを分担して頂くことにより、外部からの依頼にも応じられる演奏団体としての体制をととのえつつあります。

最近の主な活動

1971年

10月28日　第22回定期演奏会　　厚生年金会館ホール
交響管弦楽のための音楽＝芥川也寸志、フルート協奏曲＝モーツァルト（澄川千津独奏）、交響曲第1番「巨人」＝マーラー

11月7日　東日本薬学生合唱連盟演奏会　郵便貯金会館
交響曲第9番＝ベートーベン　　指揮：小林研一郎

12月15日，17日　第九特別演奏会　　日比谷公会堂
パッサカリアとフーガ　ハ短調＝バッハ・ストコフスキー、交響曲第9番「合唱付」＝ベートーヴェン
独唱：大川隆子、秋葉京子、金谷良三、田島好一

72年2月7日　新響新春特別演奏会　　日比谷公会堂
パッサカリアとフーガ、Vn協奏曲＝メンデルスゾーン（独奏：黒沼ゆり子）　交響曲第1番「巨人」マーラー

4月2日　第23回定期演奏会　　東京文化会館
交響曲第36番「リンツ」＝モーツァルト、ピアノ協奏曲第4番＝ベートーベン（独奏：遠藤郁子）、幻想交響曲＝ベルリオーズ　以上指揮：小林研一郎

6月6日　合唱団〝鯨〟演奏会に出演　　日比谷公会堂
《ブルックナーの夕べ》ミサ曲第3番（大ミサ）、テ・デウム　指揮：小林研一郎

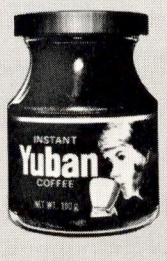
8月23日　東響・新響合同サマーコンサート　　東京文化会館
はげ山の一夜＝ムソルグスキー・スラブ行進曲＝チャイコフスキー（以上指揮：小林研一郎）、組曲「展覧会の絵」＝ムソルグスキー・ラヴェル（指揮：秋山和慶）
（指揮は特記以外　芥川也寸志）



「わたしは、いつでも香りのよい
コーヒーを飲むことを忘れない。
高貴な不屈の努力が生まれる。
もし、あなたの理解力がにぶってきたら、
コーヒーを飲みなさい。
コーヒーは、知的飲みものである。」

スイデニー・スミス
「コーヒー専科」より

コロンビアの香り、熱いコーヒー　ユーバン



コロンビア豆をぜいたくにブレンド

遠い大陸。南米コロンビア。ここが〝ユーバン〟のふるさと。
〝ユーバン〟は、ここでとれた粒よりのコロンビア豆をたっぷりと
ブレンドした、本格派のマイルドでリッチなコーヒーです。
甘い香り・丸味のある酸味・円熟したコクが、お湯を注いだ瞬間に
カップの中でいっぱいにひろがり、まろやかでぜいたくなコーヒー
をお楽しみいただけます。

GF
GENERAL FOODS